

1966 デザイン界の歩み

1 行政および振興策

通産省グッド・デザイン商品選定施策

昭和40年度下期のGマーク商品選定は、85社601点の申請があり、そのうち33社104点が選定され、東京、大阪(3月28日～4月1日)、名古屋(4月5～10日)の各地で展示、公開された。また、このグッド・デザイン商品選定事業開始以来10周年を迎える41年度上期では、各デザイン・センターの協力の下に関係業界に対する勧誘等が活発に行われたため、300社1,897点という前期の3倍を越える数が申請され、うち107社376点が選定された。これで昭和32年度選定開始以降の選定総数は988点となった。なお、この期から、雑貨部門の中から陶磁器を独立させ、繊維、機器、雑貨、家具、陶磁器の5部門に分けて運営されることになった。また、66年度の日本輸出デザイン展は「くらしの中のGマーク」をテーマとして、この41年度上期の選定品を主体として展示構成され、東京(9月20～25日)、仙台(10月11～16日)、名古屋(11月1～6日)の各地で開催された。

昭和41年度日本優秀デザイン商品輸出推進事業

この事業は通称④事業として行われてきているが、41年度より⑤事業として発展、内容も大いに改革された。主な改正点は、①従来のこの事業の対象品が、いわゆる地方固有の特産工芸雑貨を主とする日本の手工業品に絞られていたが、41年度よりこの枠を拡大し、デザインの優れた軽工業品もその対象とすることになり製品の範囲も相当の巾をもたせることになった。②選定された商品の海外PR展は、これまで日本貿易振興会の海外展示場において行われていたが、新たに海外の名ある専門見本市にも参加するという積極的な売り込み政策を打ち出したことで、しかもこれに付随して、選定された商品については積極的

に売り込みを行う商社群を参加させ、輸出組合までも参画している点である。したがって今回の見本市参加については、全出品商品にもれなく売り込み商社がつき、輸出推進へ強力な働きかけがなされることになる。③この事業の根源ともいえる優秀なデザイン開発については、今まで各機関で独自に行っていたデザイン振興事業を集約し、特に中小企業庁、日本輸出雑貨センター、陶磁器意匠センターで行われていたデザインに対する指導事業を系統化して行ない、その効率の増大をはかった点である。

以上の改正点を加えた新しい要領で実施した結果、全国33府県市が参加して、陶磁器、ガラス製品398点、その他の雑貨製品634点が選出された。選出商品は10月28日から31日までジャパン・デザイン・ハウスで国内試見会を行なったのも海外に送られた。これらの商品は日本貿易振興会の海外展示場で展示されるほか、陶磁器・ガラス製品はアメリカ・アトランティック・シティで行われる「China & Glass Show」に、また雑貨製品は西独フランクフルト市における「フランクフルト・メッセ」に出品される。

ブラッセル・デザイン・センター選定品展示会

ジャパン・デザイン・ハウスと、ベルギーのブラッセル・デザイン・センターがそれぞれの選定品を交換して行った展示会で、2月2日から14日まで、同ハウスにおいて開催された。展示品は、家具、テレビ、アイロン、オッシロスコープなどの電気機器、染織品、ガラス器、陶器など55点で、中にはめずらしい球形の電話ブースやお国ぶりをしのばせる搾乳器、色とり美しいローソクなどが含まれた、バラエティに富んだもので、総体的にハッタ

りのない、地味だが堅実さの感じられるベルギーのデザインを紹介する好感のもたれた展示会であった。なおこの展示会は大阪高島屋（2月22日～27日）、名古屋市愛知県産業貿易館（3月7日～12日）で、それぞれ開催された。

なお、日本からベルギーに送られた出品物は86点で、2月2日から約1カ月間、ブラッセル・デザイン・センターにおいて‘日本デザイン展 Design Japonais’として公開展示され好評を博した。

IAI ドイツから レオワルドとウル バンを招へい

昭和40年度の産業工芸試験所の外人意匠専門家招へい計画は、西ドイツ・ウルム造形大学デザイン研究所教授をつとめるかたわらデザイン事務所を主宰する Georg Leowald と、現在バリのデザイン事務所でインテリアと建築の主任デザイナーをしている Rupert Urban の2人のドイツ人デザイナーを招き、3月6日から産業工業試験所東京本所においてデザイン・セミナーを行った。セミナーの主な内容は：ドイツ、フランスにおけるデザイン界の現状、家具・インテリアにおけるデザイン傾向、ポリエステル椅子のデザイン・成形技術について具体例による解説、椅子の物理的、人間工学的考察、家具デザインの将来などで主としてインテリア・デザインに焦点をおいた講義と討論がスライドを混えながら行われた。またセミナー終了後、両講師による講演会が東京と大阪で開催され、‘家具、建築におけるプレファブ化’、‘インテリアを中心とした新材料の方向’などのテーマによる講演が行われた。

通産省デザイン 課が検査課と合 併

通産省貿易振興局デザイン課は、同省の組織変更にもなつて4月25日付で同局検査課と合併し、新しく検査デザイン課として発足した。初代課長は前検査課長久米山秀夫氏が就任。この組織変更によって同課のデザイン関係は、総括班、デザイン奨励班、デザイン業務班の編成となった。

第20回工芸連合 部会

恒例の工業技術連絡会議工芸連合部会が5月17日～18日、福井市、福井県民会館において行われた。参加者は中央デザイン関係機関、全国公設試験研究機関の代表者で、一般議題のほか、デザイン、技術向分科会、研究発表が行われ、また、‘デザイン・システムのあり方’と題して東大生研の池辺陽教授の特別講演も行われた。なお、分科会においては、41年度の共同研究テーマとして、デザイン分科会は人体計測（主として手掌計測）ならびに照明器具の実態調査の研究要領が決められ、また、技術分科会においては、木材含水率の実態調査ならびに着色剤の標準に関する研究について実施が決められた。

'66 日本輸出デ ザイン展

通産省、東京都、デザイン振興協議会が主催する輸出デザイン展は、輸出振興に寄与するデザインを多角的にとり扱う総合的なデザイ

ン展で38年以来毎年開催されているが、今年は、すぐれたデザインの製品が、生活の向上、販売促進や輸出の振興に果たす役割の重要性を考え、‘くらしの中のGマーク’のテーマで9月20日～25日、東京・日本橋高島屋で開催された。政府選定のグッド・デザイン商品（主として40、41年度選定のもの）約250点と、デザイン・プロセスの説明資料などが展示され、また、商品テスト機械による実演も行われ、‘Gマーク’に対する一般の認識を深めるという点で効果のある展示会になっていた。開催の前日にテレビで紹介されたり、期間中に皇太子御夫妻が観に来られたりで話題になった。

学校用家具の JIS 制定

普通教室、特別教室用の木製学校用家具は昭和27年にJISに制定されているが、その後の学童生徒の体位向上、学習内容の変化、新材料、技術の進歩にともない実情にそぐわなくなったので、昭和38年以来、文部省、通産省の専門委員会検討が続けられていたが、12月に普通教室用家具がJIS化された。制定されたJISの内容は、①木材、木質材料、スチール、軽金属、プラスチックなど適用材料の範囲がひろげられた、②児童生徒の体位の伸びを考慮して人間工学的な配慮により寸法がきめられた、③新しい学習内容に適應させるため教室における児童生徒の姿勢や行動も考慮してプロトタイプの試作を行い、十分に検討を加えた寸法、構造をきめた、④品質向上のため、机・椅子の強度試験に、新たに繰返し衝撃試験を加え、家具のJISとしてははじめての動的試験がとり入れられている。

ジャパン・デザ イン・ハウス

日本貿易振興会（JETRO）の事業の一環であるジャパン・デザイン・ハウスでは、例年のようにすぐれたデザイン商品の選定・展示、機関誌の刊行などの出版活動、内外デザイン機関・関係者との交流など、各種のデザイン関係事業が行われたが、そのうちの展示会活動についてみると、ハウス選定品の常設展示以外につきのような展示会が行われた。まず特別展としては、2月2日～14日の‘ブラッセル・デザイン・センター選定品展示会’（別項参照）、JETROと地方庁が行なっている海外優秀商品収集事業の一環である‘海外収集見本展示会’（6月7日～9日）、ジャパン・デザイン・ハウスの移転を機会に開館披露をかねて開かれた‘産業とデザイン活動展’（9月12日～22日）、アメリカ・アトランティック・シティにおける‘China and Glass Show’への出品物の国内展示会、また各種展示会としては、10月に‘海を渡るこけし展’、‘機械デザイン・コンクール発表展示会’が、11月には‘輸出陶磁器デザイン・コンクール発表展示会’‘今日のカンボジア展’などが同ハウス展示場において開催された。

なお、8月に、JETROがこれまでの東京八重洲口国際観光会館から、赤坂葵町の米国大

使館前の共同通信会館内に移転し、これにもなってジャパン・デザイン・ハウスも同会館7階に移設された。

大阪デザイン・ハウス

大阪を中心とする地域のデザイン振興事業を行っている大阪デザインハウスでは、この年も例年のように優秀デザイン商品の選定、展示、選定商品の紹介あつせん等の商品選定事業、また各種展示会、講演会、研究会の開催、後援などの振興普及活動、あるいは各種相談、コンクールの指導助成、ハウス賞の選定などの指導奨励活動等々と、幅広いデザイン振興事業を推進した。その中から、二、三の活動をひろってみると、まず商品の選定は月平均7件の予備選定会を開いており、予備選定の上勧誘した商品と、業者からの自主的審査請求商品を加えて毎月1回各分野の専門デザイナー、消費者代表からなる審査委員会によって選定したが、この年も審査請求数、選定商品数が大巾に増加しており、デザインに対する企業の認識が深まりつつあることが察知された。

振興普及事業の一つである第5回グッド・デザイン・フェアは2月に開催された。これには同ハウス選定商品を展示したほかハウスにおいて行った改善指導商品を新旧対比という形でみせる試みも行われ、展示スペースの拡大とともに一段と充実した催しとなった。今回のフェアでは、消費大衆がグッドデザイン商品を買ひ、使うことがデザイン啓蒙、普及の要といであるということにポイントをおいて企画されている。

なお、デザイン振興懇談会(官公庁デザイン振興機関等で構成)は、この年から2月をデザイン振興月間として関係行事をこの月に集中的に行うことにきめたが、このフェアもその趣旨に沿ったもので、このほか工業デザイン講座、優良輸出雑貨展などもこの期間に行われている。

このほか、デザイン分科会、大阪デザインハウス賞の選定、大阪府下の中小企業を対象とするデザイン指導などが行われ、また11月には東南アジアのデザイン調査団を編成し、宮島久七氏を団長に5名が同月25日出発、香港、シンガポール、マラヤ、タイ、カンボジア、台湾の諸国を21日間にわたり訪問した。

IAI, JETRO 海外留学生

41年度 IAI 在外研究員=小田島陽一(意匠第二部):軽工業品の造形理論および意匠分析の研究のためベルリン造形大学(西独)、山田陽保(技術第一部):住空間における商品相互機能の研究のためコンシューマーズ・ユニオン(米)ほか。

41年度 JETRO 海外留学生=上田孝(静岡県工業試験場:パーソンズ・スクール・オブ・デザイン(米)、楠畑裕也(鹿児島県木材工業試験場):イリノイ工科大学(米)、海野吉雄(岡村製作所):アート・センター・カレッジ・オブ・デザイン(米)、大野美代子(山口木材工業株式会社):オットクラウス・

デザイン事務所(スイス)。

各種デザインコンクール

〔第1回自転車デザイン・コンクール〕

応募総数113点、入賞7点

特選1席(賞金50万円):高井一郎、白井良和、特選2席(賞金15万円)2点:大倉新児/武市利治、特選3席(賞金5万円)4点:加藤健二/永森一代、堀水順子、増美一、山下久夫/網戸通夫、大柴健宏、他一名/宮崎清グループ CUP。

〔第3回 コスカ・フアニチュア・デザイン・コンペティション〕

応募総数179点、入賞・佳作8点

1等(賞金50万円):ダイニング・ルーム・セット(小笠原紀男)、2等(20万円):リビング・ルーム・セット(森川正造)、2等(20万円):リビング・ルーム・セット(田中聡行)、3等(10万円):リビング・ルーム・セット(福田友美)、佳作3点:リビング・ルーム・セット(今崎務)/リビング・ルーム・セット(二井建二)/ダイニング・ルーム・セット(荒井維一)

〔第15回毎日工業デザイン〕

応募総数237点、入賞14点、課題数14

特選1席(通産大臣賞状、毎日工業デザイン賞賞牌・副賞50万円):超小型高性能ステレオ再生装置(中沢金四郎、内村勝)、特選2席(工業技術院長賞状、毎日工業デザイン賞賞牌・副賞30万円):サンヨー9型ポータブル・テレビジョン(八木和昭、柴田弘男)、特選3席(東京都知事賞状、毎日工業デザイン賞賞牌・副賞20万円):ニッポータイムレコーダー(巽正和、西本良平、八十常充、古川幹男)、特選3席(大阪府知事賞状、毎日工業デザイン賞賞牌・副賞20万円):婦人用ボンネット式ヘア・ドライヤー(福本昇、藤原秋良、吉田俊彦、河田義昭、沢村藤夫、上田正巳、平野幸雄)、特選3席(愛知県知事賞状、毎日工業デザイン賞賞牌・副賞20万円):事務用捺印器具(野村義幸)、入選(毎日工業デザイン賞賞牌・副賞10万円)5点:三菱鉛筆削器(伊藤紀之)/ニッポータイムレコーダー(斎藤共永、島崎尚一、小林征治)/サンヨー9型ポータブル・テレビジョン(小川健一、岡崎由勝、黒川治夫)/婦人用ボンネット式ヘア・ドライヤー(伊藤義明、内藤政敏、菊地礼、杉山好彦、勘田晃、谷口千寿子、藤平佳子)/日ざまし時計(門蔵敏、山岸輝雄、阪口章)、奨励賞(毎日工業デザイン賞賞牌・副賞5万円)4点:ブラザー家庭用自動ジグザグ・ミシン(平井たかし)/センターボット式オイルヒーター(松岡誠士、西山昭雄)/トヨタ・コンピューター(白井順二)/鎮製椅子(畑田明裕、金子雅充)

〔第7回機械デザイン・コンクール〕

応募総数158点、入賞15点、入選31点

通産大臣賞(副賞50万円):テレビ(中沢金四郎)、東京都知事賞(副賞15万円):スライド映写機(海野和生、原田亮、柳田穰二)、大阪府知事賞(副賞15万円):電気カミソリ(横田勇雄、我藤典照、武内正和)、日本貿易振興会特別賞・日本機械輸出組合賞(副賞10万円):写真機(下田常三、八木大彦、沢田欣也、中西武彦、岡田貞夫、石井英徳、佐久間正之)、日本写真機工業会賞(副賞5万円):8ミリ撮影機(渡田功)、日本映画機械工業会賞(副賞5万円):スライド映写機(伏見康子、桐隆一)、電子機械工業会賞(副賞5万円)2点:テープレコーダー(菊地鉄男、横山忠昭、片倉邦彦)、ポータブル・テレビ(高瀬隆二、石川弘、山本武人、鈴木孝郎、井村五郎、望月彬也、佐瀬恒)、日本照明器具工業会賞(副賞5万円):照明器具(布田則子、細田義孝)、日本事務機械工業会賞(副賞5万円):計算機(間蔵敏)、日本自転車工業会賞(副賞5万円):自転車(大槻一夫)、日本時計協会賞(副賞5万円):時計(玉征夫)、日本機械デザイン・センター賞(副賞5万円)3点:時計(松本猛)、テープレコーダー(石井満、加藤義郎)、自転車(森久慈)

〔第10回雑貨デザイン・コンクール〕

応募総数368点、入賞20点、入選82点

通産大臣賞(副賞30万円):調味料セット(石川宏市), 中小企業庁長官賞(10万円):こどものためのシェルター(福岡幸夫), 通産省繊維雑貨局長賞(10万円):ベビーベッド(金森弘司), 東京都知事賞(10万円):ベビーカー(四倉正勝, 工藤晃嗣), 日本輸出雑貨センター賞(5万円)および日本貿易振興会賞(記念品):水筒(緒方康二), 日本輸出雑貨センター賞(5万円)15点:郵便受(宮正明), 竹による皿(斎藤英子), 灰皿スタンド(山根昭男), ガラス・ペンダント(宇野文夫), ガス・コンロ2点(八木沼秀夫), 卓上用ガスコンロ(三浦文吉, 加藤健二), オルゴール付き宝石箱(川上修二), 万年カレンダー付きたばこケース(上田和宏, 上田正巳), 灰皿スタンド(津上尚也), ベンチ(桐隆一, 伏見康子), ゴミ箱(阪井良種), メールボックス(本庄弘, 浜田研二), ベビーカー(天沼昭彦), 調味料セット(佐藤万里子)

〔第10回輸出陶磁器デザイン・コンクール〕

応募総数163点, 入賞12点, 佳作10点, 入選38点
 総理大臣賞:ピュッフエ・パーティ・セット(水野守), 通産大臣賞:Garden ware(笹山忠保, 小西立土, 村木茂), 中小企業庁長官賞:ダイナ・ウェア(浅井礼二郎), 通産省貿易振興局長賞:Daily use dinner set Japan(加藤武, 小島睦, 筒井修), 愛知県知事賞:朱泥 wall tile(加藤武, 小島睦, 筒井修), 岐阜県知事賞:ランタン(河川建彦, 三宅あき子), 名古屋市長賞:あかり(三浦祥治), 日本陶業連盟会長賞:ファミリー・セット(奥村幸喜知, 水野健二), 日本陶磁器輸出組合理事長賞:上人形(箱垣太津男), 日本陶磁器工匠センター理事長賞:高邁(笠井節一, 田上俊雄, 広瀬美智子), 日本陶磁器検査協会理事長賞:Stor ring ware(勝毅貞徳), 日本貿易振興会会長賞:Fancy drinks set(大腸正祥, 伊藤千代子)

2 一般デザイン界

工業デザインと材料協会設立

工業デザイナーと工業材料メーカー相互の理解を深めることにより, 工業材料メーカーに適切な目標を示し, 生産性向上に貢献し, また工業デザイナーの材料選択や管理を便にすることを目的として設立されたもので, 1月20日, 都立工業奨励館において設立発起人総

会を行い発足した。協会の事業には, ①工業材料と工業デザインの振興に関する対策の樹立および実現推進 ②国会, 政府等に対する意見の具中, 工業材料とデザインに関して総意の表明 ③工業材料とデザインに関する調査, 研究, 各種情報の交換, 資料の収集, 刊行物の発行 ④工業材料使用法の研究, 整理の指定および管理 ⑤工業材料とデザインについての発表会, 講演会, 展示会, 懇談会, 研究会, 見学会等の開催および参加 ⑥その他, 会の目的を達成するために必要な事項, があげられており, 野口達弥東工大教授を会長とし, 工業デザイナー, 材料メーカー, 大学教授など31名が役員に就任した。事務局:東京都立工業奨励館内。

環境と工業を結ぶ会

工業デザイン, 建築, 産業技術などを扱う雑誌“造”(発行きつき書房)の編集者, 執筆者が中心となって, この‘造’の主張を一層組織的に固めようと‘環境と工業を結ぶ会’を結成した。

‘本来, 人間生活に貢献すべき工業が, その混乱のために, かえって害を及ぼす面が出てきている今日, これを正しい方向に導くため関係分野の人々が一緒になって問題解決に当ろう’というのが, その発会の趣旨で, 工業デザイナー, 建築家, プランナー, 関係技術者, 研究者, 産業界から38名が設立発起人となっている。1966年1月号から会の責任で‘造’を発行しており, 3月25日には初の総会と発会の披露をかねたパーティが東京・麻布の国際文化会館において行われた。連絡先:東京都中野区東郷町50竹一マンション25号きつき書房。

東京造形大学

桑沢学園はデザインの専門教育機関として, 桑沢デザイン研究所を創設して10年余になるが, このたびデザインおよび美術を含む, より高度の4年制大学の設立を意図し, ‘東京造形大学’を新設, 4月より開校した。学部, 学科の構成は, 造形学部のもとにデザイン学科(学科長勝見勝), 美術学科(学科長佐藤忠良)の2学科をおき, 両学科の教育方針として, 産業界との実践的交流, あるいは旧来の純粋美術教育の観念および方法を脱却して, 近代造形を他分野との横断的関連において学ばせることを特色としている。南多摩丘陵の八王子城跡のふもとに本部および教室, 実習場をもつ校舎が建設された。

ピニン・ファリナ死去

現代自動車史上に大きな足跡を残してきた, Giovanni Battista Pininfarina がローザンヌの病院で内臓病加療中, 4月2日夜, 死去した。72才。

自動車の揺籃期に生れ, 育った彼は1937年に発表したランチア・アブリリアのボディ・デザインで早くもヨーロッパにおける自動車ボディ・デザイナーとしてクローズ・アップされている。以来, 理想的な流線形と伝統的な自動車らしさの調和をもつ, いわゆるファリ

ナ・ラインを生み出し、1951年にはニューヨーク近代美術館が「現代の自動車ボディ・デザインの基礎を築いたもの」として選んだ8台の自動車の中に、有名なチンタリア・クーベが選ばれている。

彼の母国イタリアのフィアット、ランチア、フェラーリをはじめとして、米、英、仏の各国からボディ・デザインを依頼され、世界中にイタリアン・カー・デザインの流行をもたらしたことに大きく貢献したことは衆目の認めるところである。日本にも数回訪れており、世界デザイン会議の折にも小柄だが精力的な姿を会場にあらわしていた。わが国ではニッサンのブルーバード、セドリックが彼のデザインによるものといわれている。イタリア国内では労働の騎士の称号、フランスのレジョン・ド・ヌールを、英国ではイタリア人としてただ1人の英国王室美術家協会の名誉会員となっており、1957年には黄金コンパス国際大賞を得ている。

万国博のマーク 決る

1970年に大阪で開催される日本万国博覧会のシンボル・マークのデザインが、一度選んだ作品が採用されず、やり直しの末、ようやく4月4日発表された。

同博のシンボル・マーク選考委員会（委員長：勝見勝、委員：河野鷹思、丹下健三、原弘、梶野善一、桑原武夫）では当初わが国のグラフィック・デザイナー15人と2団体に競作させたものの中から西島伊三雄氏の作品を第1位に選んだが、石坂泰三万国博協会長をはじめ副会長3人も、その西島氏の作品が抽象的でわかりにくいという理由で反対したので、結局採用にならなかった。そこで選考委員会では再び指名競作を行って、大高猛氏（大高デザイン・アソシエーツ主宰、日宣美会員）の作品を選んだところ、これには石坂会長も賛成で採用することに決定した。決定したマークは、さくらの花をモチーフにし、JEXPO '70の文字を配したもので、作者は、「さくらの花では日本を表徴した。5枚の花弁は五大州、つまり世界を表わし、ともに手を取りあって日本万国博への参加を視覚化した。中央の円は日の丸で、その周囲の余白は発展への余裕と伸びよとする意図を表わした……。」と述べている。

大阪デザイン・ ハウス賞 '66

大阪デザインハウスが設立したときから始められ、今回で第6回を迎えた大阪デザインハウス賞'66は、例年のように前年度のハウス選定品の中から次の3点が最優秀デザインとして選ばれ表彰された。

電子式卓上計算機「コンベット20」CS-20A（出品：早川電機工業株式会社、デザイン：同社）；乾電池カミソリBMR-120「エドワード」（出品：日立家電販売株式会社、製造：株式会社日立製作所、デザイン：株式会社日立製作所家電研究所）；A-4型脚立（出品：日本アルミニウム工業株式会社、デザイン：平川純一、藤原友介）。

クラフト・セン ター・ジャパン 賞

財団法人クラフト・センター・ジャパンが、東京日本橋丸善に展示場をもって設立されて以来8年になったが、本年より前年度選定品の中から優秀作品を選んで年間賞を与えることになり、その第1回受賞作品が5月12日発表された。ただし、今回の授賞は、対象を前年度開催した地方別展示会に出品したものに限定して行われた。

第1回受賞作品は、金賞：展開竹大皿（宮崎珠太郎）、銀賞：砥部の深鉢ならびに筒の一連の作品（梅野精陶所・デザイン：玉藤省治）、香川の挽物煎茶筒（秋山漆器店）、静岡の木製玩具「鳥」（日本輸出木工株式会社）、南部の厚手鍋（南部鉄瓶商工業協同組合）、高岡の青銅花瓶の一連の作品（島政雄）の各作品が選ばれ表彰された。

'66 日本ニュー ク・ラフト展

日本デザイナー・クラフトマン協会が主催する第7回目の'66ニュー・クラフト展が6月17日から22日まで東京銀座松屋において開催され、全国から寄せられた493点の応募作品のうち303点の作品が展示された。また、40年度から設けられたニュー・クラフト賞は、今年度は加藤嘉明デザインの陶器・蓋物と、那賀清彦デザインの一貫張・盛器に与えられた。

デザインの著作 権について再度 要望書を提出

40年秋にデザイナー団体が著作権制度審議会へデザインの著作権について要望書を提出し、未だほとんど保護されていないデザインの著作権などの保護を要請したが、その後同審議会より発表された答申案によると不備と思われる点が多いので、6月28日、かさねて要望書を提出した。その主な内容は、①答申案にある保護される応用美術の範囲が美術工芸品のみに限られているので、工業製品をも含む広い範囲を保護の対象としてほしい。②室内設計は建築物の一部として建築に含めて解釈してほしい。③答申中に法人著作がとりあげられているが、既定の工業所有権でも保護するのは考案者個人で、それを譲渡されてはじめて法人の所有となっているから、法人著作の規定を設ける必要がなく、工業所有権にも影響することが考えられるので、考慮してほしい、などとなっている。

第16回アスペン 国際デザイン会 議

恒例のアスペン国際デザイン会議は7月19日から6日間、アメリカ・コロラド州アスペンにおいて開催された。今年の議題は「20世紀におけるデザインのなりたちとその資源」で、ヘンリー・ドレフェース、レオ・リオリ、ベン・シャーン、レイナード・バンナムらおよそ20名による講演が行われた。

デザイン盗用 2 題

その一：この年の10月に東京で開かれた「第9回国際ガン会議」を記念して郵政省が一般から募集した「ガン征圧切手」の特選作品が既発表の作品と酷似しているため、不採用と決定した旨7月12日の新聞に報道された。この作品は顕微鏡をモチーフとしたものだが、

その顕微鏡の図案がチャールス・ゴスリン(米)の作品に酷似していたことが判ったため、このコンペの審査員だった宮本三郎、渡辺紳一郎、山名文夫、三井高陽、長田裕二、(吉田富三欠席)の5氏によって協議した結果、'デザインの一部に他人の作品を採用したと思われるものを記念切手に使うべきではない'という意見がまとめられ、すでに試刷りの段階にはいていた同作品を不採用と決定し、改めて入選作品4点の中から、手術風景をテーマとした作品を採用することになった。ところが、これがまたフィンランドのオンニ・プリオの作品とその発想が似ているということで再び採用を見合わせる事になり、再度審査員が集って残りの入選、佳作の中から採用作品を選ぶことになった。その結果、東京の高橋透氏の作品を切手の図柄に採用することに決定し、二重盗作事件もようやく落ち着いたと思われたのも束の間、またもやこの作品にもケチがつけられた、というのは'発表されたデザインのコバルト照射器は某社の製品であり公共性をもつ切手の図案に特定業者の製品がとりあげられるのは好ましくない、という苦情が舞い込んだのである。早速調査するとなるほど某社製品であることが判ったが、発行情日切迫しているため急ぎ郵政省技芸官室でデザインの修正を行い7月19日に正式に大蔵省印刷局に発注しやっこの問題にピリオドが打たれた。

その二：ガン切手事件のほとぼりがさめかけた8月12日夕刊に'今度は似たポスター'という見出しで、ユニバシアード用ポスターに対する盗作の疑いが報道された。ユニバシアード組織委員会が募集した東京大会のポスター1位入賞作品が、原水協が出版した'広島・長崎ドキュメント1961'の表紙デザインに似ているというのである。このポスターは芸術専攻科のある8大学に限って募集し、1位に多摩美大の中村輝夫氏の作品が選ばれたもので、作品は白地に10個の同心円が描かれ、中心の円は深紅で外に広がるにしたがって赤色が薄くなり'燃える太陽'を象徴した図案になっている。これに対して'広島・長崎ドキュメント'のデザインは杉浦康平、粟津潔両氏が担当したもので、白地にチャコール・グレーの12個の同心円が描かれており、同心円の数、色彩は異なるが全体の印象が似ているというのである。そこで東京ユニバシアード組織委ではポスター、シンボルマーク審査委員会を開いて協議した結果、①色彩、構成、着想とも独創的である ②同心円のデザインは類似作品が数多くあり、類似作品のあることを委員会でも十分知った上での審査であり、1位入賞は動かないとして、発表どおり同作品の1位入賞を確認した。以上が真夏におきた連続デザイン盗用事件のてんまつである。

和製ノル家具の発表会

ミースのバルセロナ・チェアをはじめ、フローレンス・ノル、エロー・サーリネン、ハリ

ー・ベルトイア、イサム・ノグチなど一流デザイナーのデザインを製品化して売り出しているノル社(米)の日本支社として設立された国際インテリア株式会社は、かねてより試作を進めていた和製ノル家具の初の発表会が7月29、30日の両日、東京・赤坂プリンスホテルで開かれた。

この発表会に対する関心の一つは写真などでなじみ深い家具を、わが国の家具のポテンシャルデザイナーがどれだけ確実にそれらのデザインを再現してみせるかであり、もう一つは輸入家具として途方もない価格がどの程度まで引下げられるかということであった。

出品された70余種の家具は、そのほとんどが日本製で、部品などに直接アメリカから取りよせたものが含まれているとしても、短期間で製作したことを考えれば、まず見事なできばえであるといえる。ただ椅子張りが不馴れのせいも多少見劣りがするようであった。しかしこれは次第に改善されることが十分期待できると思われ、わが国でもやれば十分やれることを示してくれたことは心づよいことであった。問題は価格で、どの程度の売れゆきを見込んで設備投資の償却をするか等々は、はじめてのことでもありむずかしい問題で、第三者が云々することではないとはいえ、いかにも高すぎ、輸入した場合よりも2割がた安いとの当事者の話であったが、輸入の場合と大差がないという印象が強かったようである。

日本デザイン団体協議会発足

かねてより懸案のデザイナー団体間の連絡協議会設立案が具体化し、8月9日、日本デザイン団体協議会が発足した。設立準備をはじめたときに参加していたが、事情で加入をとりやめる団体もあって、最終的には、日本インダストリアル・デザイナー協会(JIDA)、日本室内設計家協会、日本デザイナー・クラフトマン協会(JDCA)の3団体がメンバーとなって発足した。41年度の役員は、協議委員長：豊口克平(JIDA)、副委員長：芳武茂介(JDCA)、監事団体：JIDA、担当事務局をJIDA事務局におくことを決め、9月12日に東京プリンス・ホテルにおいて発会式と記念パーティを行なった。今後、会員団体の相互理解、相互援助によって、ともにデザインを通じて産業経済と総合文化の進展に貢献してゆく旨の声明をしている。

'66 インテリア・ショー

9月9日から1週間、東京・銀座松屋において第1回のインテリア・ショーが開かれた。このショーはインテリア産業関係のメーカー30数社の製品を、菊竹清訓、剣持勇、亀倉雄策、栄久庵憲司、川添登、浜口隆一ら建築、デザイン界の一流メンバー20名により構成された審査会が選んだ作品を展示したもので、その中から入賞作品として、金賞：藤森健二の曲木の椅子(秋田木工)、銀賞：多田美波のあかり(昭和ガス化学)、銅賞：京唐紙(京橋松屋)が選ばれた。主催インテリア産業協会。

JIDA '66 デザイン会議

JIDA は40年秋に第1回日本インダストリアル・デザイン会議を開催して、ID に課された新しい生活環境創造と人間社会の福祉の増進のために積極的に奉仕すべきであるという宣言を発表したが、これを将来に向けてどのように発展させ具体化するべきかについて、さらに考え、反省すべきところは反省し、新しい行動のための端緒を見出すことを目的として、'66 デザイン会議を開催した。会議は、9月28、29日の両日国立京都国際会館において行われ、JIDA 会員、賛助会員のほか一般業界の有識者、報道関係者を含めておよそ400名あまりが参加して、熱心な討論が行われた。

第1日は一般公開のもとに、午前は記念講演として、京都大学人文科学研究所の加藤秀俊氏の「デザインのゆくえ」と題する講演があり、午後「日本のIDのあり方」と題するパネル・ディスカッションが行われた。

第2日は、JIDA 会員のみによる三つの分科会に分れて、それぞれ「JIDA 会員の社会的地位」「JIDA の組織と方向」「JIDA の国際的立場」をテーマに参加者全員が意見を申しあげて討論するという形式で行われた。

家具の品質表示

数年前から検討が続けられていた家具の品質表示が11月から実施された。さしあたって対象となる品目は「机およびテーブル」「イス」「タンス」の3品目で、品名、価格のほか、①寸法、②表面材の種類、③仕上げ塗料の種類、④内部材料、⑤材木の乾燥度を表示することになった。

ニッポン・グッドデザイン・ショー '66

地方自治体が中心となって開催される数少ない総合デザイン展であるこのニッポン・グッドデザイン・ショー '66 がこの年も11月1日から6日まで、愛知県産業貿易館において開かれた。この展示会は中部地域のデザイン水準向上をはかることを目的としているが、今回は、わが国のすぐれたデザイン商品を紹介展示することを眼目に、①選定品、各デザインハウス選定品、地方公設試験機関、中部デザイン関係団体作品および4センターのデザイン・コンクール受賞作品の発表展示ならびに '66 日本輸出デザイン展を会場内に再現するなど、およそ2000点に達する製品が展示された。また会期中にはデザイン講演会や映画会などもあわせて催された。主催：愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所、陶磁器、繊維、輸出雑貨、機械の各デザインセンター、および中部デザイン協会。

グッドデザイン展 '66

日本デザイン・コミッティが主催する66年度のグッドデザイン展は、「デザイン・オン・ザ・テーブル」をテーマに全国から募集した作品の中から優れたものを選んで、11月11日から16日まで、東京・銀座松屋で開催した。今回のグッドデザイン賞は次の5作品に与えられた。インテリア・ポット(植木木魚子)、オーナメント・ライト(デザイン・リサーチ)、

リビング・セット、テーブル・セット(わたなべひろこ、山岸純史)、ユニット・ボックス(北川佳子)、ベッドランプ(清水俊彦)。

第12回毎日産業デザイン賞

この毎日産業デザイン賞は前年の9月から授賞する年の8月までの間に起きたデザインに関する事象の中から、5人の選考委員(第12回の委員は、勝見勝、亀倉雄策、原弘、剣持勇、小池岩太郎)によって選出されるもので今回は下記の12点の最終候補の中から、毎日産業デザイン賞には、グラフィック・デザイン展「ペルソナ」(制作者：栗津潔、宇野亜喜良、片山利弘、勝井三雄、木村恒久、田中一光、永井一正、福田繁雄、細谷誠、横尾忠則、和田誠)が、また毎日産業デザイン特別賞には、15年にわたり工業デザイン運動に貢献した日本インダストリアル・デザイナー協会(JIDA)が選ばれた。

最終候補作品：①ペルソナ展 ②「世界のトレード・マーケットとシンボル」 亀倉雄策著 ③カットふうの型 ガラス・佐々木硝子 ④15年になったJIDA ⑤佐藤潤四郎の各務クリスタルにおける業績 ⑥ソニーのステレオ製品群 ⑦東新プレスの子べら連の商品群 ⑧富士通信機の機器デザイン ⑨東洋陶器の衛生陶器 ⑩松屋のグッド・デザイン・コーナーとコミッティ ⑪三菱MU-2型飛行機のデザイン ⑫多田美波の電光デザイン活動。

日本デザイン保護機関連合会 社団法人に改組

昭和40年3月にデザイン保護を目的として、機械、輸出雑貨、陶磁器、繊維の4センターと全国各地の意匠考案保護機関40数団体によって「全国デザイン保護機関連合会」が設立され、デザイン保護に関する諸問題の解決、保護機関相互の連絡と質の向上につとめてきたが、任意団体であったため地方行政機関や関係官庁などとの対外的な折衝力が弱く、関係補助金の交付も受けられない状況から所期の目的を十分果すまででいたらなかった。そこで連合会では社団法人への改組にふみ切ったもので、これまでの組織を発展的に解散し、12月13日、新たに「社団法人日本デザイン保護機関連合会」を設立し、全国デザイン保護機関の総合体としてデザイン登録制度の健全な運営に当り、わが国デザインの一層の向上発展に寄与することになった。当面の事業計画としては、特許庁に準じて各機関の審査基準の調整；各機関の審査員の研修会、繊維、陶磁器、金属雑貨、木材雑貨、玩具および機械の6部会を設けて各専門部会を開催する；資料の頒布；地方特産品に関する資料の収集；紛争の仲介などがあげられている。なお会長には井上尚一(昭和ネオブレン・元特許庁長官)、理事長は大村林太郎(静岡市考案保護審議会長)、専務理事に橋田貫一(日本機械デザインセンター専務理事)の各氏が就任の予定。事務所は東京・虎の門の日本機械デザインセンター内となっている。

3 産 業 界

集積回路の企業 化はじまる

電子工業における革命児といわれる集積回路—インテグレートッド・サーキット=IC—がいよいよわが国でも生産が開始され、このICを採用した製品が次々に発表された。

1~2ミリのシリコンの小片に抵抗器、ダイオードなどの回路素子を植えつけ、1立方センチの容積の中に300個もの部品集積密度が可能といわれるこの集積回路は、1958年にアメリカのテキサス・インスツルメンツ社が開発したもので、主として軍事用、宇宙開発用の電子回路として利用されてきたものだが、このICのもつ高信頼度、小型軽量、低電力化、高速化、経済性などのすぐれた特性を、最近ますます高度化し複雑化してきた電子機器に採用しようという動きは世界的な傾向となっている折から、わが国電子機器メーカーもその生産にふみ切ったものである。このICはその生産上の条件として相当数の量産体制をとらないと採算がとれないことから、米国のように軍事用という大きな需要をもたないわが国の場合、大型電算機、工業用電子装置などのほかにカラーテレビ、ラジオなど民生用電子機器での需要を早急に開拓し、国産のIC競争力を強化しようという意欲が強く、家庭電気機器、音響メーカーも将来のIC化に備えて研究に拍車をかけている。

これまでにわが国で試作に成功したIC採用機種には、大型電算機、工作機械のオートメーション装置、卓上電子計算機、などの専門用機種のほか、テレビ、カラーテレビ、ラジオ、ステレオ、マイクロホンなどがあるが、例えば、卓上電子計算機の場合は、従来のものに比べて容積で $\frac{1}{4}$ 、重さで $\frac{1}{2}$ に小型化され、またテレビでは、ハンダ付箇所が60カ所から10カ所に減少した、など、ほとんどの製品が性能の面とともに小型、軽量化、経済性に優れた効果を示しており、今後さらに研究、開発が進むにつれてポケットテレビや、ポケット電子計算機の実現も夢ではないといわれている。

ともかく、この年におけるICの実用化は第一段階を経たばかりであり、次年度以降、ますますその利用範囲が拡大され、かつての電子工業に革命をもたらしたトランジスタと同様に、このICも極めて大きな役割をこなしてゆくものと思われる。

ソリッド・ステート とモジュラー・ステレオ

ステレオ製品に2つの傾向がみられた。ソリッド・ステート（オールドランジスタ化）とモジュラー・ステレオである。

ステレオ製品におけるアンプ、チューナー類のトランジスタ化は、①電力消費がチューブ式の約 $\frac{1}{2}$ ②故障が少ない③作動が早いなど、

種々の長所があるにもかかわらず、価格が高く、アンプ用に適したものの開発がおくっていたことから、これまで本格的には採用されず、わずかな数が試験的に市販される程度にとどまっていたが、その後技術の向上や量産体制がととのったことから、この年に入って急速にトランジスタ化が進み、音響専門メーカーや家電メーカーから、‘ソリッド・ステート’をうたい文句にオールドランジスタ化されたステレオやアンプが次々と市販され、この分野にも‘トランジスタ時代到来’を思わせた。

このソリッド・ステートと併行してモジュラー・ステレオと称するステレオ・システムが流行のきざしをみせた。このモジュラー・ステレオとは、プレーヤーとアンプを一つのケースに組込んで一体化し、これと小型スピーカーシステム2個とで構成するステレオで、小型スピーカーを本棚や机の上、壁面などに自由に配置することのできる小型セパレートステレオは、ヨーロッパ、アメリカでも流行しはじめているステレオの新しい傾向である。このタイプはわが国の狭い住宅事情にマッチしているところから、人気を呼んでおり電器メーカーも続々とこのタイプの製品を市場に送り出している。また、このシステムに似たタイプで、プレーヤーとアンプを別々に分けた小型コンポーネント・タイプのステレオもあらわれ、今後ますますステレオの小型化の傾向が強められてゆくのではないかとみられている。

カートリッジ式 テープレコーダー

この年におけるテープレコーダーの製品傾向の一つにカートリッジ式のものの商品化が活発に行われたことがあげられる。

録音テープのカートリッジ化は、これまでフィリップス（オランダ）、テレフンケン（西独）、リアジェット（米）などの各社がそれぞれ独自の方式を開発し特許をもっていて、各国に規格統一のはたらきかけをしている状態で、もちろんわが国においては規格はきめられてはいなかった。したがって、テープの互換性がないことから、わが国のメーカーはこの種のテープレコーダーの商品化には積極的ではなかった。ところが、その後、オランダのフィリップス社が同社のもつカートリッジ方式の特許を日本のメーカーに無償提供を申し入れたことによって、にわかにこの方式のテープレコーダーが注目され、結局大手のメーカーをはじめ多くのメーカーがフィリップス方式を採用することになり、各社からこの種新製品が相ついで発表、発売された。

この方式によるテープは録音速度毎秒4.75センチで往復1時間録音可能で、10.0×6.4×1.2センチという小型のプラスチックケースに納められており、小型、軽量にまとめられる上、録音、再生操作などが簡単であり、性能もすぐれていることから、今後相当普及するものとみられている。

なお、前記のカートリッジ式の話題のほか

に、これまで高級専門機種にみられたパーティカル・タイプ（縦置き式）のテープレコーダーが、一般家庭用普及機種にも相当数あらわれ、流行の観を呈したこともこの年におけるデザイン傾向の一つとみることができる。

本格的な大衆乗用車時代はじまる

テレビをはじめとする家庭電化ブームが幕あけた昭和28年を「電化元年」と呼んだが、この年、昭和41年は本格的な大衆乗用車時代の到来を告げる「マイカー元年」と呼ぶのにふさわしい年であった。

わが国の乗用車は、従来、会社、官庁の需要にささえられていたが、昭和30年のスズライト・フロントにはじまるわが国独得の軽四輪乗用車の発展によって地固めされたマイカー層が、パブリカに代表される700~800ccクラスの乗用車の大きな需要を満たし、依然として需要のある軽四輪車とともに大衆乗用車として、乗用車の中で大きなシェアを占めるまでにいたっているが、この大衆乗用車の1000ccクラスへの移行ということが、この年の大きな動きであった。

この1000ccクラスへの移行という事態は激増しつつあるマイカー層の、より充実した乗用車への欲求と、それを見込んだメーカーの政策とによる当然の成行きともみられるが、その実現にはわが国の自動車技術の向上という裏づけがあることも見のがすことはできない。例えば、この年の4月に発売された日産のサニーは発売当時非常に人気を呼んだものだが、そのすぐれた性能とともに、41万円という価格には一般、業界とも一様におどろきの感をもたれたものであった。これは、むろん大量生産を見越しての価格ではあろうが、かつての700~800ccクラスの車と同程度あるいはむしろ低い価格となし得たことは、自動車製造技術の向上を如実に物語るものであろう。

また、1000cc移行の理由としては、700~800ccクラスでは性能、居住性の点でものたりない感じは拭いきれず、結局あらゆる面を、ある程度カバーし得る最低のものとして、また経済性、税利の面を考慮して最も妥当な線として1000cc車が考えられたと思われる。一方、軽四輪乗用車は大方の予想をくつがえして、需要は下降線をたどらず、かえって新たにこの分野に進出するメーカーさえ現われた。本田技研、ダイハツ工業の両社が新たに軽四輪乗用車を発表し、鈴木自動車も新型モデルを準備中という新事態が起っている。これはわが国の市街地における特殊な道路事情と、経済性の点からの需要が多く、今後もお相当の需要が見込めるとのメーカーの見透しからこの筆に出たものとみられているが、特に本田技研の新軽四輪車は31万円台という低価格で発売されることは、これまでの軽四輪車価格の割高感を払拭するとともに他車価格の引下げを促進するものとして一般から歓迎され、これによりさらに低い所得層への浸透がはかられることが考えられる。

ともあれ、サニー、スバル1000、カローラの新車出現にもなるとして既存の800ccクラスのほとんどが1000~1100ccに格上げされ、また、軽四輪車もダイハツ・フェロー、ホンダN360の新車を加え、あわせて14種類ものファミリーカーが勢揃いしてマイカー層の需要を分けあい、ますますモータリゼーションの進行を助長してゆくものと思われる。

事務用機器

事務の合理化と能率向上促進の気運を反映して各種の事務機器の需要がふえ、これにともなう事務機メーカーの新製品開発、商品化が目立った。

前年まで数社から4~5種の国産機が市販されていた程度だった卓上電子計算機も、この年には新たに5~6社新型機種で10数種が加わり、ますますそのシェア争いが激しくなってきた。

また、2年ほど前から原稿の色を問わず、分厚い書物、両面印刷物、図面から立体のものまでコピーが簡単にとれるというキャッチフレーズで一躍複写機分野のちょう見となった電子複写機はそのすぐれた性能から需要が急増し、既存4メーカーに、新たに4メーカーがこの部門に進出することになり、販売戦激化の様相をみせている。

これまでのオフィスにおける印刷はガリ版切り、手刷りが常識で、これに要する労力と時間は大へんなものだったが、最近急ピッチで進んでいる社内印刷・文書管理の合理化に対処するため、事務機メーカーでは小型オフセット印刷機の開発が積極的に進められた。新製品はいずれも印刷工程がワンレバーで行われ、だれにでも、手軽に取扱え、しかも小型軽量というのが共通の特徴で、人手不足、人件費の高騰、執務上のムダをはぶくなど事務の合理化の気運を背景に各社きそって新方式の開発にのり出している。

家庭用電気機器の普及率

日本電気工業会が41年7月1日現在でまとめたわが国の家庭電気製品の普及率は次のとおりで、前年に引続き電気冷蔵庫(6.5%増)が最も高い増加率を示しており、電気掃除機、電気洗濯機が4%台でこれに続いている。(カッコ内は40年7月1日現在の普及率。なおこの数字は40年10月に行われた国勢調査の結果にもとづいて修正されたもので、従って34巻1号記載の普及率とは若干異なっている)。
電気アイロン：84.0% (82.8)、電気洗濯機：65.8% (61.8)、扇風機：59.1% (55.7)、電気こたつ：57.8% (54.8)、電気冷蔵庫：55.3% (48.8)、電気釜：54.7% (53.8)、電気あんか：35.3% (34.6)、電気掃除機：34.0% (29.9)、電気ストーブ：9.7% (9.0)、電気毛布：5.0% (3.8)。

自動車業界再編の動き

40年に日産とプリンスが合併を決定し自動車業界に大きな話題を提供したが、この年にも第2弾として10月にトヨタと日野が、また12月にはいすゞと富士重工がそれぞれ業務提携

を発表し、自動車業界再編成の気運がにわかになたかまった感がある。この二つの提携は米
国資本の攻勢にゆずぶられている欧州各国
によくみられる、企業連合方式とも呼ばれる
ケースと同様の、実質的には合併に近い効果
をねらいながら企業としての自主性を認め合
うというのが特徴で、比較的やりやすい再編
の手段として評価されており、今後の業界再
編促進に影響があるものとみられている。
資本の自由化を前にして、自動車業界の国際
競争力強化に必要な体制整備という問題に対
処する経済界の一つの大きな動きであった。

電気自動車の開 発進む

かつての自動車技術の播らん期に、蒸気車、
ガソリン車と覇をきそい結局姿を消した電気
自動車が再び脚光をあびようとしている。
自動車による事故、公害に対する世論のかま
びすしい折から、この11月、12月にかけて相
ついで電気自動車の試作車が発表され、話題
を呼んだ。いずれも電力会社がイニシアチブ
をとり、これに電池、電機、自動車の各メー
カーが協力する形をとる一連の会社グループ
によって開発研究が進められてきたもので、
その目的には公害対策とともに夜間余剰電力
利用のための新規需要の開拓といふ経済効果も
ねらっており、これが電力会社にイニシア
チブをとらせるゆえんであろう。今日のめざ
ましいモータリゼーションの進行では自動車
による公害は増加の一途をたどると思われる
が、その防止の一助となる電気自動車の実用
化促進への期待は大きい。

発表された試作車は、関西電力グループ（関
西電力、日本電池、ダイハツ工業、日本輸送
機）がダイハツ・コンパーノに、中部電力グ
ループ（中部電力、神鋼電機、湯浅蓄電池）
がトヨタ・コロナバン、東京電力（東京電力、
三菱重工、三菱電機、日本電池）が三菱 360
に、それぞれ改良型鉛電池あるいはアルカリ
電池を動力源として搭載したもので、性能も
最高速度 70~80 km/h、経済速度 45~60
km/h、1 充電走行距離 80~95 km と一応実
用的なデータが出ている。もちろんガソリン
車に比べると大分下廻る性能ではあるが、電
気自動車特有の長所、例えば、電動駆動によ
るため極めて静粛であり、排気も出さず、変
速機構が不用なので、従って操作も簡単であ
る、など多くの利点があるため特定用途車、
例えば作業車、配達車などにはその力を発揮
するものと思われる。現に英国では郵便、牛
乳配達車や工場内の運搬用にすでに実用化し
つつあるといわれており、わが国にお目見え
するのも案外近いかもしれない。

しかしながら、この電気自動車の本格的な
（ガソリン車に伍するような）実用的段階に
はまだだいぶさきのことになるとみられてお
り、その成否も今後の蓄電池の開発改良いか
んにかかっているといえそうである。

カメラの製品傾 向

スチールカメラの製品傾向は、この年に入っ
てカメラ・マニアを対象とする TTL 一眼

レフのような高級機種と、ハーフサイズ、イ
ンスタマチックに代表される大衆カメラの二
方向にむかう度合いを一層強め、その中間的
役割をはたすレンジャッター機種は若干の
電子シャッター内蔵の新製品が登場したほか
は見るべきものがなかった。

これは戦後の日本人の心をささえてきた象徴
商品としてのカメラの需要は、他の消費、レ
ジャー財の発達、国民所得水準の向上によっ
て消え去ろうとしており、現在のカメラ需要
は真にカメラ・メカニズムを楽しむマニアと
写真を単に生活の記録にとらえカメラをその
媒体と考える一般ユーザーとに二分されつつ
ある。これは世界に共通するカメラ需要のパ
ターンであり、カメラの新製品傾向が経済性
の強いハーフサイズ、撮影の容易なインスタ
マチックなど大衆機種と、一眼レフなどの高
級カメラが国際市場においても需要増加をつ
づけつつある理由ともなっている。

先年来、わが国カメラ業界にとって大きな問
題であったインスタマチック対ラビッドカメ
ラと、シングル 8 対スーパー 8 の国内市場に
おける競合のその後の推移は、まず前者につ
いては、インスタマチック、ラビッドカメラ
ともに売れゆきがさえず相うち形で、これ
は専用フィルムの割高感がネックとなって経
済性の高いハーフサイズに敗れたものとみら
れている。

また後者については、スーパー 8 フィルムの
国産化が行われなかったので、この勝負は次
年に持ち越されたが、富士につづいてキャノ
ン、小西六、ヤシカがシングル 8 カメラを発
表して富士に追いつく構えを示しているの
で、スーパー 8 より一歩先んじている形であ
る。また、富士は年初頭よりアメリカ、ヨー
ロッパ、中南米と相ついでシングル 8 の輸出
を開始し、世界市場の 90% を占めるコダック
、アグファ両社へなぐり込みをかけたこと
は、純国産 8 ミリ初の海外進出の快挙として
特筆される。（日本工業新聞 12・16）

製品の話

携帯用 VTR：7 月にソニーから電池で駆動
する携帯型テレビ録画専用機の開発に成功し
たことが発表された。直流電流で駆動する超
小型ビデオコーダーは世界でも初めてのもの
で、屋外での録画が自由にできることから、
将来 8 ミリカメラに大きな影響をおよぼすの
ではないかとの声がかかれた。この超小型
VTR は、大きさが 32.8×14.0×11.6 センチ、
4.25 キロと普通の家庭用 VTR より大巾にコ
ンパクト化されていることから、映像を録画
するという同じ目的をもつ 8 ミリカメラ業界
も無関心ではいられず、悲観論、楽観論をと
りまぜた、さまざまな表情がうかがわれた。
もちろん、テレビカメラを含むこの録画機の
ほかに再生装置、テープなど一式をそろえれ
ば 40 万円もの費用がかかることから、現在
では 8 ミリカメラと競合するよしもないが、
電子工業技術の発展がめざましい今日、この
両者が一般用の映像記録装置として優劣を競

うのも案外近い将来かもしれない。
なお、カラーテレビの放送時間の増大にも
なって、カラーテレビの売れゆきが順調に伸
びているところから、家庭用カラー VTR の
開発研究も進み、ソニー、松下、東芝、ビク
ターなど各社からつぎつぎと試作機が発表さ
れている。

速度制限つきモペット：本田技研工業から7
月に速度が制限された二輪車「リトルホンダ」
を売り出した。これは自転車に50ccのエン
ジンをのせた「ペダルつきモペット」で、ヨ
ーロッパでは免許なしでのれる二輪車として
広く普及しているものと同じタイプの車であ
る。リトルホンダの操作は、レバーを押して
自転車のようにペダルをふみレバーをはなす
とエンジンがかかり、あとはアクセルで速度
が加減でき、止まり方は自転車と同じように
ハンドルブレーキを引くだけというきわめて
簡単な操作で乗れるもので、また価格が3万
円以下なので、国内的に自転車の需要層に与
える影響は大きいものとみられている。

自動設計加工システム：日立製作所が自動車
のモデルチェンジに要する時間を大幅に短縮
できる画期的な自動車設計加工システムの開
発に成功した。これはレーザー光線や太陽電
池電子計算機など最新の技術を結集して完成
したもので、従来2年以上かかるとされてい
た粘土づくりの模型から生産開始までの期間
が1年前後に短縮でき、自動車工業の国際競
争力強化に大きく役立つものとされている。
自動車のモデル・チェンジを行う場合、デザ
イナーが粘土で作った模型をあらゆる角度か
ら細かく測定し、そのデータから設計に必要
な各種の図面を作成する方法をとっているが、
この自動システムではレーザー光線を模型
から常に一定の距離に保つように設定し、
模型には直接ふれず、模型の形状を網目状
に連続的になぞって敏速に測定することがで
きる。この測定結果を電子計算機に記憶させ、
こうしてできた数値制御切削用テープを数値
制御装置付大型フライス盤にかけて自動的に
プレス用金型を完成するというものである。
自動設計加工システムの開発は現在、世界的
にもその必要性が認識されており、米国など
でも研究開発が進んでいるといわれる。日立
の自動設計加工システムの価格は電子計算機
を除き2～3億円。(日本経済7・19)

バリコンを使わないラジオ：バリコンを使わ
ない世界初の電子式自動同調ラジオが6月に
松下電器から発表された。このラジオはバリ
コンのかわりに同社が開発した大容量、高変
化率の可変容量ダイオードを使用したもの
で、その可変容量ダイオードを使用したもの
で、その特徴は、①525～1605キロサイクル
までの全周波数帯(中波)を受信できる②ワン
タッチ自動選局ができる③雑音がすくない、
など。

**二眼レフのローライから一眼レフと35ミリカ
メラ：**二眼レフカメラのローライレフを40数
年間生産し続けているフランケ・ハイデッケ
社から初めて6×6一眼レフと35ミリカメラ
がこの年のフォトキナにおいて発表された。
かつて6×6判二眼レフ全盛時代は最高級カ
メラとしてローライレフは品質、生産量にお
いて全世界に君臨していたが、その後感光材
料の質の向上やレンズの性能の急速な進歩に
ともなって次第に35ミリカメラ時代へと移行
し、さらに現在の一眼レフカメラへと発展し
てきているが、こうしたカメラの変革の時機
においてもその流れに便乗することなく、依
然として従来のローライレフをはじめ同系の
二眼レフ・シリーズを生産し、積極的に開発
を続けているこの会社の姿勢には見習うべき
点が多々あるといえる。このハイデッケ社が
なぜ新たに一眼レフに進出したかは最近6×
6乃至6×7判のカメラが再び脚光をあびる
きざしがみえてきている、つまり、カラー時
代が機動性に富むこの種大判カメラを要求し
つつあることから今回の発表となったものと
みられている。

このローライ SL 66 は一見したところハッ
セルブラッドをひとまわり大きくして蛇腹を
つけたといった感じであるが、実際にはフィ
ルムサイズとタイプが共通する以外には似て
いるところはなく、特に焦点調節機構を蛇腹
式にしたことが外観、機能両面における大き
な特徴となっており、最大50ミリのくり出し
によって接写リングなどを使わなくても十分
な接写ができ、またレンズを後向きにつける
と標準レンズでも1.5倍まで拡大撮影ができ
るといった変わった機能をもち合わせており、
またロールホルダーの引き蓋をぬかないうち
はフィルムが巻き上げられない、フィルムを
巻かないうちはすべての撮影操作が作動しな
いといったフル・プルーフも徹底しており、
そのほかにもゆきとどいた心づかいのみ
られる、いかにもドイツ製品らしいカメラで
ある。そして早くも、かつてのライカ対コン
タックスと同様、このローライフレックス
SL 66 がハッセルブラッドの好敵手に擬せら
れているのもまた当然のこのように思われる。

また、同時に発表されたローライ35は、35ミ
リフルサイズカメラでありながら97×60×32
ミリ、重さ390グラムというハーフサイズカ
メラをしのぐ超小型で、なつかしい沈胴式鏡
胴部をもつユニークなデザインのカメラであ
る。

プラスチック・ペーパー：化学技術者にとっ
て一つの夢だった紙の合成が実現した。その
開発に成功したのは日本加工紙(株)で、その
成功は同業界をはじめ化学、印刷業界に大き
な反響をよんだ。この合成紙は紙の生命とも
いべき印刷性にすぐれているのが特徴で、
高級印刷中でも多色刷の場合にアート紙以上
の性能を発揮するといわれている。

この合成紙の製造はポリスチレンまたは塩ビなどの可塑性プラスチックの表面を物理的、化学的に「紙状」に処理するもので、従来紙にくらべて、①石油化学製品なので紙業界が当面している原木不足が解消できる②従来紙のようにぼろ大な設備と大量の用水を必要としない③従来紙の1/10の重さ、厚さにできる④湿気による伸縮率が非常に少ない(0.1%)ので精密印刷に適し、また表面平滑性、白度がすぐれ、ぬれても強い、など多くの利点があげられる。

この新しいプラスチック・ペーパーに対し、関係業界ではその技術を高く評価する一方、技術的には可能でも商品としての経済性が問題だとしているが、結局、この時点ではプラスチックを紙の分野に使える可能性を実証したところで、商品化はこれからということになるが、同社では量産化すればコストダウンができるので、特殊用途で需要を開拓したあと一般印刷用紙への進出を考えており、石油、プラスチック加工、原料メーカー、印刷の各業界もかなり関心を示しており、新製品として脚光をあびる可能性は十分あるとみられている。

トヨタ 2000GT 世界記録を樹立: トヨタ自動車とヤマハ発動機が業務提携して開発したGTカー、トヨタ2000GTがJAF(日本自動車連盟)公認のもので10月1日から「国際ならびに世界耐久スピード記録挑戦会」を開いたが、4日、午後4時スタート以来、72時間10,000マイルを平均時速206.19キロで完走し、その結果、世界記録3、国際記録13を樹立した。3つの世界記録はこれまでのフォード・コメット(4700cc)の記録を上まわるもので、わが国自動車工業の水準の高さを示すものとして注目された。

600万円の軽飛行機: YS-11(日本航空機製造)、MU-2(三菱重工)、N-62(伊藤忠商事)に続く国産機、富士重工のFA-200「エアロ・スバル」が10月に運輸省の型式証明を受けて生産を開始することになった。このFA-200は、ほとんどの曲技飛行ができる軽飛行機としては第一級のもので、スポーツ用、訓練用、連絡用、業務用と幅広い需要対象が考えられており、価格はスタンダードで598万円となっている。大きさは幅9.42メートル、長さ7.96メートル、高さ2.6メートルの低翼4人乗で、航続距離は1200キロ。

図形を描く電子計算機: ライトペンを使って図形と文字処理ができるわが国初のグラフィック・ディスプレイ・システムの試作機を日立製作所が開発した。

純国産技術で開発したこのシステムは、電子計算機の新しい分野を開いたもので、約30センチ平方のブラウン管上に文字と図形を自由に平行移動、回転、拡大、縮小を行うことのできるもの。このシステムのディスプレイ制

御部は磁気コア記憶装置をともなったデジタル型電子計算機で、この磁気コア・メモリーによって各種の命令を取り出したり、図形の表示指令を出したりすることができる。またライトペンから送られた信号は割り込み処理を行うが、これによって航空機、船舶、自動車などのデザインをはじめ、建造物などの構造体の強度計算、人工衛星の軌道計算もできるという。(日本工業11・18)

電子レンジ: 夢の調理器といわれる電子レンジはこの年に入って需要が増大し、今後の成長製品としても期待されて、早川電機、日本電線、松下電器、三菱電機、東芝などの大手電機メーカーが本格的にこの電子レンジの製品開発、量産化にとりくみはじめた。

電子レンジは高周波(2450メガサイクル)を食品に照射し加熱調理するレンジで、①食品調理時間が短く、②食品を食器に入れたまま加工でき、③食品の形、栄養、風味、そこなわれず、④殺菌効果がある、などのすぐれた特長をもっているが、価格が高いことから一般には普及せずわずかに業務用として使用される程度だったが、最近の料飲店などの人手不足に伴う需要もあつて販売数が伸長しはじめ、さらにコールド・チェーンによる食品輸送方式の具体化にともなって、冷凍食品の解凍用としての用途が見込まれるところから、各社一せいに新製品の開発にのり出し、秋に20万円以下の機種が発売されたのを機に各社とも積極的に一般家庭を対象とした小型、低価格機種の開発をすすめ、次年中には20万円を大幅に下まわる家庭用専用機が市販されるのではないかとみられている。

超大型タンカー出光丸: 1月に建造された世界一のマンモスタンカー東京丸(150,000重量トン)をはるかに上回る超大型タンカー出光丸(209,000重量トン)が12月に石川島播磨重工横浜工場において完成された。この出光丸は、長さが東京駅新幹線ホームとほぼ等しい342メートル、幅49.8メートル、上甲板の広さが後案地球場の1.3倍、1回の航海で運べる原油の量が200,000キロリットル以上という世界最大の超大型船で、日本の造船技術の粋を集めて建造されたものである。このような超大型タンカーの需要は、世界各国とも原油の使用量が年を追って増大し、より早く、より大量に、より安く産地から原油を輸送する必要と、加えてタンカーの大型化によって運航コストが安くなるということから、各国が競って超大型タンカーを要求するようになり、造船技術の進歩と相まって今後タンカーはますます大型化の方向に進むとみられている。